

# 縄文時代のカメ棺の出現と弥生文化前段の問題

—西日本における縄文終末期の葬制—

賀 川 光 夫

はじめに

縄文農耕論の展開とともに、弥生式文化の諸相と、縄文終末期における問題討議は、ここ数年来のことである。加えて、朝鮮半島南部と西日本各地との対応すべき研究がこの問題を更に前進せしめることになっている。また朝鮮半島、日本へのコースはその起点としての大陸に発生した文化の諸相に影響されるものと思われるから、彼の地での発生的研究に期待しなければならぬことは当然である。縄文終末や弥生文化の起源が、大陸、半島で発生した文化の諸相を間違いなく伝えたかどうか、問題はあるとして、その本流の中で事を進めなければならぬことは、誰れの眼にも疑うことなく映つるのではないだろうか。かつて、私は大陸と日本の関係を、縄文終末期において、わずかではあったが確実な資料にもとずいて考察（1960、1961、賀川）した。しかしそれは、崑山文化と縄文終末期の相似という点で、周辺地域の研究不足もあって、大きく否定（1968、佐原）された。そして、大石遺跡の集落の構造と生産技術の諸問題についての研究に再考を求める警告となった。だが、その後黒く磨研された土器や、扁平石器一群の研究は、一部に積極的賛成論者もあらわれたがそうした否定論者の中からも次第に進められ、近時の半島においての相似を問題とするまでになった。特に梅原末治氏の黒陶系土器論（1969、梅原）はその中で興味をひく研究であった。

朝鮮半島における黒陶系土器の出現に先んじて、この土器の背景を、集落、生産、葬例などの各方面から追求しようとする考えは、私の大石遺跡とその周辺での調査の間にすゝめられていった。そして、この頃から「照葉樹林文化」（1969、上山地）、「植物生態学の諸相」（1966、中尾）についての自然科学者の間から、農耕の起源が注目され、民俗学者の間からは東南アジアの焼畑農耕（1971、佐々木）の問題が提起されていった。これら植物育種、民俗学による生産技術の研究は、縄文終末期や、弥生文化の諸相を大きく生産、生活の舞台の中から推理することを指示することになった。

1970年私は縄文晩期の農耕論を、生産技術と集落の構造の中から追求した論文“Primitive Agriculture in Japan: Latest Jōmon Agricultural Society and Means of Production”をハワイ大学の ASIAN PERSPECTIVES（1974、賀川）の依頼で書いた。この論文は、私の縄文農耕論の第2期的研究のはじまりである。植物育種学や、民俗学などについての研究とともに、考古学の視点での集落の構造、生産の問題（石器の検討）、宗教の研究は、確実な資料をとおして進められねばならぬ。この研究の一つに、農耕の起源に関係あるとみられる埋葬、すなはち葬礼として、カメ棺の

固着の風習が注目される。

カメ棺は、弥生時代の葬法の一つとして西日本の特徴とされるが、この葬法が縄文終末の時期に系統的な葬法の形として登場し、それが、黒色磨研土器の出現と同時期であることで注目される。現在のところ黒色磨研土器の出現期（後期黒色磨研土器Ⅰ式「三万田式」）を前後する時期に遺体をカメに納めることが普及し、この磨研土器出現の直前、磨消縄文Ⅲ式土器（西平a式）に起源を求めようとするところが二ヶ所の遺跡で確認された。長崎県南高来郡国見町筏遺跡（1969、古田）と、福岡県京都郡刈田町浄土院遺跡（1972、小田他）におけるカメ棺で、この二例はカメを棺とする葬制の初めである。特に浄土院遺跡では、火葬骨の収納がみとめられ葬制のうえで火葬がおこなわれていたことを知る。火葬は何のためにおこなわれたか、これを宗教的問題と結びつけて考えることもできるであろうが、ともかく成人の遺骸を火葬してカメに納めることになった。この問題も追求されねばならぬ。また、カメ棺発生と前後して、西日本では壺などの容器副葬があらわれ、その中に供献の品を考えねばならぬ。大陸先史時代において、この容器にはアワなどの穀類が副葬（1963、中国科学院）されたことを認める資料が報告されているので興味をひく。

カメ棺の起りと、農耕の起源は、西日本における弥生式文化の発生と諸相をみる場合、きわめて重要なことで、弥生文化前段として縄文後晩期の問題が注目される。

## 1. 縄文後期の葬制（カメ棺発生の時期）

### （Ⅰ）

九州各地で発見される縄文後期の埋葬遺構は、まさしく多種多様で、統一的葬制というものはほとんどみあたらず。屈葬という、縄文各時代を通じての遺骸処理法は共通しているが、この問題を除けば埋葬法にいちじるしい相違が目立つ。それらのうち各地の特異な葬礼をあげて説明をすることにする。

長崎県島原半島の東北、低い海岸段丘に立地した広い範囲にわたる縄文後期磨消縄文Ⅲ式（西平式）の土器を出土するところが筏遺跡である。この遺跡でのカメ棺出土（1969、賀川）も報告され埋葬にみるべきものが多い。特にカメ棺が多数発見されて注目されるが、カメ棺にまぎって、改葬墓と判断されるものがみられて興味をひいた。

埋葬遺構は皿状に掘られた土壇と、貝の詰った小さなピット（径20cm、深さ20cm）がその土壇中に存在した。皿状のピットは、一部に骨片が残されていて、その状態から一次埋葬の場所と考えられ、その中央に掘られた二次の小ピットは成人大腿骨一本（部分）を縦に納め、それに多頭形石器（十字形）をそえて安置してある。明かに洗骨二次埋葬の一次的遺構である。大腿骨と多頭石器を安置した後に貝を詰めたものと推定され、貝殻はカキ類が主体となっていた。この遺構は、全体が混土貝層でおおわれていたが、皿状遺構中に設けられたピット内の貝殻とは明確に区別されていたことは注目される。

一次埋葬後、洗骨改葬された遺骨の一部（分骨）がピットに納められ、呪術具としての多頭石器をそえ、カキ類を詰める。混土貝層は、その後に堆積されたものとみることができる。改葬された

遺骸は何処に葬られたか問題が残るが、最寄りの場所に縄文後期磨消縄文Ⅲ式（西平）a（磨消縄文の残るもの）深鉢形土器を三個副葬し、祭壇と考えられる平石（厚い）を安置し、伏ガメ二個があった。この伏ガメは高1m弱の大きさで、粗整、荒い条痕をもって仕上げられたもので、カメの状況、又は副葬の三個の土器、祭壇状に安置された平石などから埋葬の場所であり、再埋葬の墓地と考えられる。

改葬例としては、青森県天狗岱（1918、笠井）や、同平賀町唐竹（1968、江坂）など東北地方にも類例があり、又愛知県吉胡貝塚などでは、成人の遺骸が小さなカメ（1964、清野、1952文化財保護委員会）に納められていたことは有名である。更に千葉県松戸市千駄掘貝塚では勝坂式土器に成人遺骸の収納（1933、平野）があるなど、縄文時代の改葬は案外に数多くおこなわれていたように考えてよい。筏遺跡の場合は、こうした改葬に呪術具としての多頭石器をもちいている点や改葬に単カメを伏カメとして棺としていることなどが興味をひく。

## （Ⅱ）

福岡県京都郡苅田町大字片島浄土院遺跡（1972、小田、内藤）は筏遺跡の改葬を更に明かに証明した。この成人女性は、磨消縄文Ⅲ式aであるから筏遺跡の伏ガメと同時期である。人類学的考察は内藤芳篤氏によっておこなわれ、それが火葬によるものと確認された。火葬による改葬例は前の吉胡貝塚に例があるが、縄文後期の例は類例がない。

火葬して遺骸をカメに納めるという実例は数少ないが、縄文時代に数多く発見されるカメ棺が比較的小さく、しかも千葉県千駄掘の例の如く成人遺骸を納めるとすると、火葬か、遺骸処理（洗骨）かを必要とする。この点では弥生前期のカメ棺、壺棺などに納められた人骨の総点検も必要ではなからうか。

## （Ⅲ）

福岡県遠賀郡芦屋町田屋の山鹿貝塚は砂丘上に展開する馬蹄状の貝塚で、縄文前期轟式土器を埋蔵する下貝塚と、縄文後期磨消縄文Ⅰ式a・同Ⅱ式土器（福田K一Ⅱ式と鐘ヶ崎式）を包含する上貝塚との二つの貝塚がある。砂丘の周辺に馬蹄形に展開する貝塚、砂丘の中央に田屋部落の聚霊廟（納骨堂）があって、この附近が1965年の調査によって縄文後期の人骨が出土した地点である。調査者の九州大学永井昌文教授（1972、永井他）によると、発掘された人骨は三体で水平位をとり北に頭部を安置して並置し、下肢の屈折著しい仰臥の姿勢であった。うち成人の二体はともに鎖骨、胸骨、肋骨のほとんどが除去されるという異様なもので、更にその一体は第四頸骨以下仙骨にいたるまでの、椎骨と、両側の肩甲骨まで欠除していた。この胸部骨除去の二体は、一体の女性が頭骨がやや離れている以外は、混乱なく埋葬されているので、この異様な人骨について問題が提起された。胸部骨の除去が、死後たゞちにおこなわれたか、埋葬後白骨した時期に除去したか推理がおこなわれるが、いずれにしても出土状況からすると、埋葬場所でこの胸部骨除去がおこなわれたことになる。

この人骨の一体の、第12胸椎体上（胸の中央）に、所謂大珠（緑白色軟玉長75mm巾31mm厚さ14mm比重2.7 硬度3、重さ56.1g）が発見された。この位置が胸部骨除去部位の中央にあったために、

首から垂下されていたものか、遺骸安置後、胸部（空洞化した）に安置したものかいずれかであって、後者とすれば各部骨除去の時期が問題となる。

胸部骨除去と、大珠の安置、この不思議な埋葬は一体何をあらわすのであろうか。第一の胸部骨除去は靈魂除去、即ち屈葬による死者葬礼のもっとも切実な方法であり、第二の大珠安置は、靈魂除去によって胸骨破壊による恐怖、災難などの除魔、呪術的鎮魂など考えることができよう。靈魂の再起をふせぎ、魂を鎮めるための葬法として、この胸部骨除去、大珠安置はあまりにも切実な遺骸の処理である。各部骨除去の技術的困難性はともかくとして、屈葬という再起をふせぐ伝統的縄文葬制の更に顕著な例といえる。

この特異な葬制について、梅原末治博士は（1969、梅原）「福岡県山鹿貝塚出土の鯉節形大珠」と題する論文で、上古の禽獣魚形勾玉の類として幾内古式古墳の時期にあてるなど異論もあるが、報告書に記載の通り、層的的には縄文後期と考えてよい。

縄文後、晩期葬例について、遺骸の一部をいちじるしく変形して安置した例はあまりない。それが宗教上の儀式によるものか、それ以外の理由か、にわかに判断し得ないが、山鹿人骨の異例な胸部の状況は注目に値する。このような遺骸のいちじるしい変形の例は、火葬において最大としようが、更に分散埋葬など特殊な改葬として注目されるものが、有明海一帯に集中してみられる。

#### (IV)

有明海沿岸一帯には、小ピットに貝殻をつめ器物（石斧、石鏃など）とともに遺骸の一部を埋葬した例が多く報告されている。福岡県荒多北貝塚は1969年永井昌文氏（1970・永井他）などによって調査され多数の石組の小ピット内において石斧や石鏃、ドングリや魚骨、幼児歯などが発見されている。この石組の小ピットは幼児といえども埋葬するには問題の残る面積であるから頭部のみを安置したものか、頭骨や顎骨などを改葬したものと推定される。

天草諸島のうち下島の北岸五和町二江、沖の原遺跡は、三度の調査で興味深い埋葬遺骸が発見されている。第一次は1959年と71年の二度、坂本経堯氏を中心に第二次は1973年に内藤芳篤氏（1973、内藤）により実施された。そのうち坂本氏（1971・坂本）調査で興味深い埋葬例があった。すなわち縄文後期黒色磨研土器Ⅱ式（御領）を出土する配石遺構から、その中央ポケット状に掘られた穴に貝塚がつまっていた。環状にめぐる九個の穴はすべて貝殻穴で、荒多北貝塚同様石組であった。調査者の坂本経堯氏によれば、貝塚の一部に遺骸を安置し、その頭骨のみが貝層の上に置かれていた、というのである。つまり、遺骸全体は貝層中に屈葬で没し、頭蓋のみが貝層上にでていたとするのであるから、これは意識的埋葬である。共同体の首長か、宗教的な意味をもつものか興味深い。環状のポケット状に配置された貝殻のつまった穴には、中に十字形をした多頭石器や石棒状石器がみられたという。

#### (V)

長崎半島の尖端から、五島列島の海上のルートは、朝鮮南部と、大陸えの海の道である。1971年釜山市東三洞の縄文土器上層発見の土器は長崎半島深堀遺跡の後期初頭の土器と類似したものであった。半島の先端協岬遺跡は1966年より3次の調査がおこなわれ、貴重な遺物が数多く発見された。

そのうち、屈葬遺骸の頭部に鉢形土器を安置したもの、こぶし大の礫を集石した下に大ガメの破片で胸部を覆ったもの、更には頭部に壺形土器をかぶせたものなど、数々の遺骸が発見された。

五島列島の福井島富江町の宮下貝塚では、2体の人骨に、壺形土器をそれぞれ1個づゝ副葬した列があった。脇岬や宮下貝塚での合計4例の副葬の壺は鉢形土器で一体何を入れて安置したものであるか。このような例は1973年、内藤芳篤氏によって調査された天草沖ノ原遺跡の北久根山式土

土器副葬の遺骸（縄文後期、西北九州）

県	遺跡	埋葬	副葬	土器形式
長崎	筏	カメ棺	鉢	後期磨消縄文 III
	脇岬	土壇(砂丘)	鉢	後期磨消縄文 II
	脇岬	壇(貝層)	鉢	後期磨消縄文 II
	宮下	壇(貝層)	壺	後期磨消縄文 III
熊本	宮下	壇(貝層)	壺	後期磨消縄文 III
	沖ノ原	土壇	鉢	北久根山
	沖ノ原	土壇	鉢	北久根山
	沖ノ原	土壇	鉢	北久根山

器の鉢形副葬の3例を含めると、数を増す傾向にある。

土拡墓に遺骸を屈葬し、カメに納める埋葬は次第に統一の傾向がみられはじめる。そして被カメ葬など、カメ棺の顕著な発達とともに、壺の副葬が、集中して出現し、目下のところ西北九州を中心として類例が多くなりつゝある。

副葬の意味は、葬制の宗教的確立によるものであるから、大陸などにおける先史時代の葬制においては壺に穀類（1963・中国科学院）を入れて副葬したものと報告されている。壺副葬の時期を前後して、西北九州にカメ棺の出現をみるのは興味深い。

## 2. 西日本における縄文後晩期カメ棺の発生と弥生文化推移

### (I)

縄文後期の埋葬は、前述の如く全体として地域的な差が大きく、埋葬形態としては遺骸処理法を含めて、縄文時代各期にみられたような、呪術的な宗教儀礼にもとづくものが多くみられた。特に、屈葬という特殊な遺骸の処理法は、縄文各時期にみられる葬法の一つであるが、これは死者の再生復起を絶つという意味であるといわれる。縄文前期、大恩寺稲荷洞穴（1964羽田野、坂田、1967賀川）では足骨を除去し、足先の骨を全部胸部に納めるという葬法は、そのまま後期の山鹿貝塚の胸部諸骨、又は、背椎骨除去という靈魂除去まで発達した。屈葬に加えて、包石葬などの切実な死者絶縁の葬法は、大恩寺稲荷洞穴から山鹿貝塚までの、縄文時代の遺骸処理において共通する呪術的儀式による方法といえる。

九州地方は、火山灰地帯に加えて、他の地域に比較すると温湿の割合が強い。遺骸の埋葬が、何如なる方法で行われていたか、遺骸の残される率は非常に限られる。洞穴や岩陰内部の灰層に埋没している場合や、貝塚、砂丘などの比較的カルシウム質の強い位置に保存されているものゝほか遺骨の保存は望めない。したがって、数少ない埋葬例の特徴から、この地方の葬制を探ることは非常に困難なことであるが、縄文後期というある一定の時期に限ってみれば、埋葬の特徴が有明海から五島列島にかけての所謂石鈿地帯（石鏝）、玄海灘に面した北部九州帯、東北九州の周防灘地帯と、あるテリトリに分類されて貝塚や砂丘に多くの例がみられる。加えて九州山脈地帯の採集民を含めて、それぞれの地域で、土器がある程度達（1974・賀川）のように、埋葬状態の特徴にも当然相異がみられる。

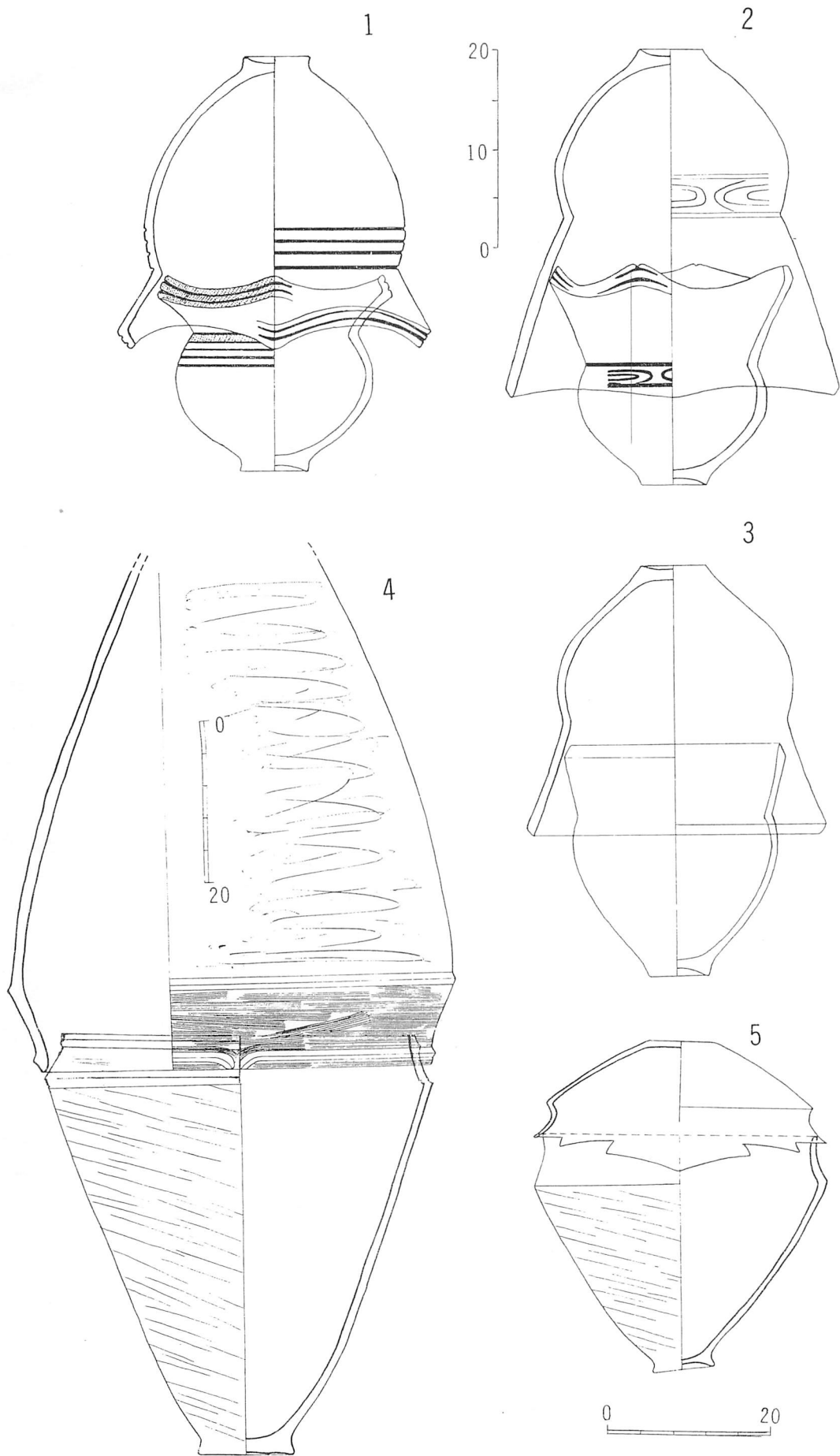
葬法の縄文的呪術儀式は、火葬や、改葬にもみられる。東北日本における縄文前期の改葬が無惨なほどに遺骸を分断して埋葬することは、後の改葬とは違って屈葬と同様、死者絶縁の切実なものといえる。後世の火葬が仏教という宗教の中から生じたものとは違って、チベットの鳥葬とよく似た方法で遺骸を破損消滅する方法の一つであるかもしれぬ。いずれにしても、採集民の中に長く死者絶縁の埋葬問題は、貝塚などに屈葬（死者絶縁）された人骨などから証明され、「貝塚はイオマンテ」（1974河野）であるとして骨から動物が再生するという考え方と、矛盾するところがないではない。これについては今後研究を続ける必要があろう。

さて、そうした縄文後期の葬制の中から、西北九州島原半島の海岸段丘や、豊前平野に面した低段丘に位置する遺跡から、明かに弥生式の前段階を考えさせるようなカメ棺が群墓として登場してくる。合口カメ棺を含めて、それまでにみられない状態の埋葬形式である。だが、このカメ棺の発生をみた同じ時期に、被カメ葬が同じ地域にみられ、壺形土器の副葬がみられた。この被カメ葬と壺の副葬は同時にカメ棺の発生と発達に関係があるものと考えられる。カメ棺の発生が東北日本のそれと基本的に異なる点は、こうした西日本の何ヶ所かの海岸地帯の低段丘から次第に広まること、それが縄文晩期磨消縄文Ⅲ式土器（西平）という「縄文ころがし」の採集民的土器形成技術から「黒色磨研土器」という新しい形式の土器が生ずる転換期であるということからである。そして、群墓的性格をもち、合口形式をとるカメ棺ということにおいて、集落の固着化と墓地（土壙とカメ棺）と葬制の固着現象とをあげることによって、採集民的性格からの脱皮を考えることができる。

## （Ⅱ）

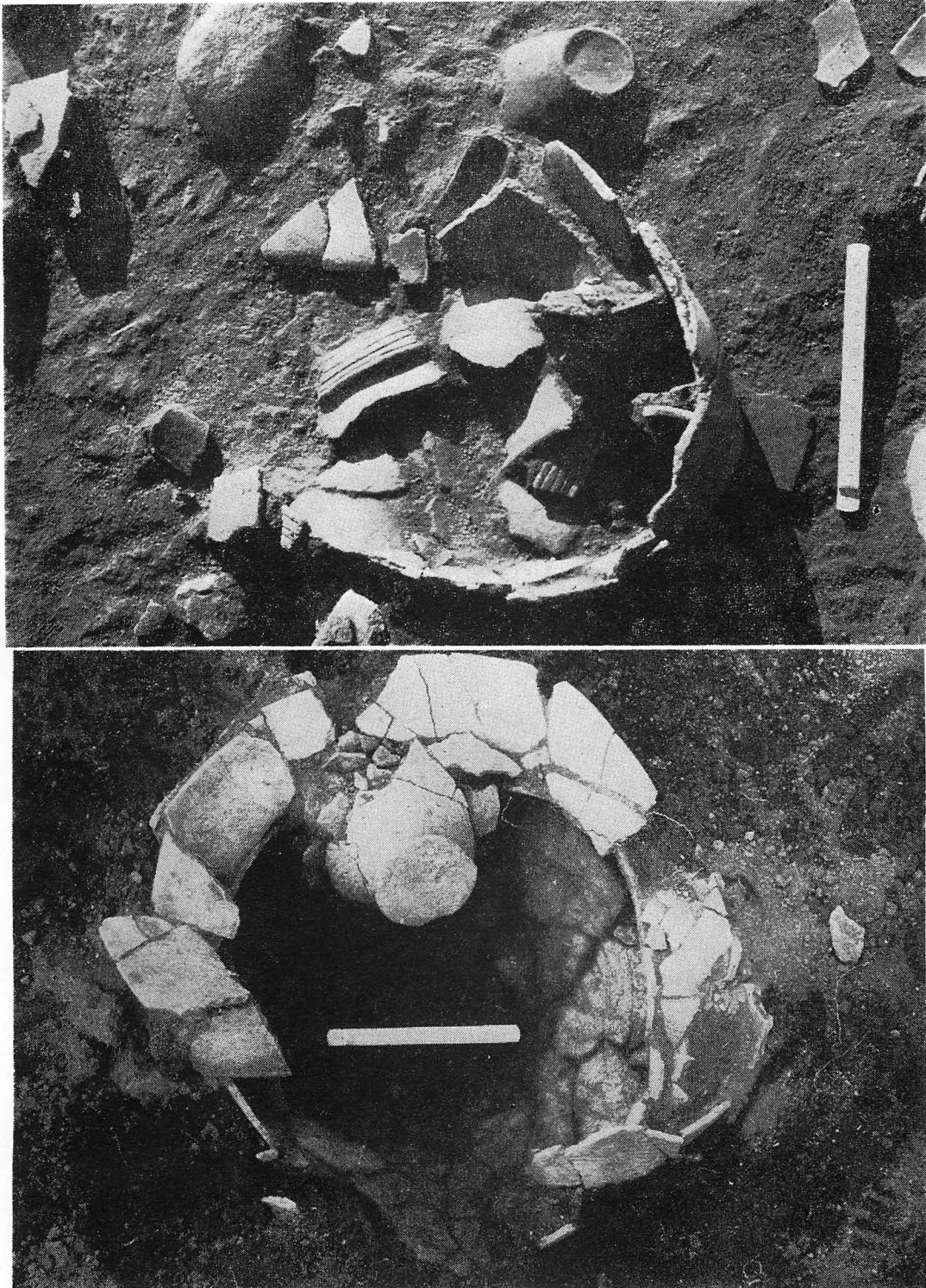
採集民からの脱皮は、西日本各地で発達しつつある集落の固着化現象により、それぞれのテリトリーごとに特殊な社会構造を作りあげていくことからはじめられた。その一つが土壙やカメ棺をもって一般的葬制とする西日本の海岸地帯の特徴である。これをカメ棺に限ってみれば、縄文後期中葉以降、西北九州や、豊前平野で合口カメ棺や、火葬骨を収納することからはじめられた葬法は、後期末から晩期初頭にかけて九州全域から、西日本一帯に広がりを見せはじめた。この縄文後期中葉から晩期初頭にかけてのカメ棺は、「縄文をころがし」の技法の消滅ということから、採集民的性格の消失を意味し、東アジアに共通する農耕社会に普遍した端正な無文、研磨土器の登場によって象徴される。縄文後期長崎県脇岬遺跡のオオムギ炭化物の出土、大分県コウゴー松遺跡（1974、賀川、橘）や同西和田遺跡（1974・大分県）などの鞍型磨殻石の出土などからみて、農耕の出現を考えるとカメ棺の出現は同時点の問題である。

縄文のカメ棺が西日本一帯で、弥生式文化の出現と関係するかどうか、多くの研究者の中で未だ意見の一致をみない。そこで、カメの棺としての利用を考えてみよう。まずカメを棺として使用する場合は、一般に合口、単カメの場合を含めて、下ガメ又は、単カメの胴部以下を大きく打ち欠いてほぼ直立させる。打ち欠いた底部は、単カメの口の部分に置く（長崎県礫石原）か全く附近には見当たらず場合とがある。次に、底部に近く、二次的穿孔をみるものがある。この場合は、カメを安置する場合、土壙など地面に接する場所に穿孔部をおき、棺の安置は直立ではなく傾斜する（大分県大石）。



第1図 縄文後、晩期合口カメ棺復原図(埋葬時下ガメ底部除去)

- 1～3 長崎県筏遺跡 縄文後期磨消縄文Ⅲ式土器 1 (a式) 2 (b式) 3 (c式)  
 4 大分県ネギネ遺跡 縄文晩期Ⅱ式b  
 5 大分県田村遺跡 縄文晩期Ⅱ式b



第2図 晩期カメ棺出土状況 上 大石（晩期Ⅰ式 胴部に二次穿孔）  
下 礫石原（晩期Ⅱ式 底部割り上蓋とする）



底部打ち欠く方法や、二次的穿孔はおそらく死者を棺内での腐敗時期を短くするものと推理される。特に合口が流行し、カメの大形化が目立つ弥生式時代には二次的穿孔という方法で遺骸の処理がおこなわれることが多い。いわば、下ガメに二次的穿孔が加えられるということ自体、弥生時代の埋葬、カメ棺の特徴ということになる。

西日本の縄文時代カメ棺が、底部を打ち欠き、二次的穿孔をみるのは、各時代の埋葬に可成り多くの類例があるが、弥生時代の源流と考えられぬものであろうか。そうすれば縄文時代における弥生式化ということもできるが、こうした背景は、やはり、埋葬形式の固着現象、すなわち、集落との関係において考えなければならぬ。

### (Ⅲ)

東北日本の縄文のカメ棺は、縄文時代の埋葬の一つの問題であった。だが西日本のそれは、発生の時期や、その性格からして、弥生文化の前段的要素があることはすでに述べた。そして、カメ棺の発達こそ、弥生文化の構造の主要な展開の基礎をなしているともいえる。縄文時期のカメ棺のうち、朝鮮半島の南部支石墓との関係もすでにあるであろう。今後半島でのカメ棺が調査研究されれば更に注目されようが、半島のカメ棺の発生と農耕の関係も追求されねばならぬ。支石墓より発見されるカメ棺から推理すると、おそらく、支石墓社会における半島の葬制にもカメの使用は存在したはずである。

朝鮮半島の無文土器文化の農耕社会が、西日本に先じて稲作社会にはいったかどうか問題はあるとして、半島南部にはむしろ稲以外の穀類栽培が相当早くから存在していたと推理され、半島中部黄海道智塔里においても磨穀石とともにアワ又はヒエ(1957・黄基徳・都宥浩)が発見されて注目されている。前述の如く、西日本のオオムギの発見と磨穀石の発見は、広義の西北九州と、東北部九州(周防灘沿岸)において多く出土例をみ、また、中東などで、ムギの収穫に使用したとみられる *side-blader* (*sickle-blade*) が、同じく西北九州や中部九州で縄文後期から晩期(1957・賀川)までをつうじて数多く発見されている。この植物遺体と磨穀石、*side-blade* の組合せは、当然半島南部にも及ぶものと推理される。

オオムギの炭化物の出土、磨穀石の発見、そして組合鎌(*sickle-beade*)の発見によって、西日本のムギなど穀類が畑作を中心として定着していたことは疑いなかろう。縄文後晩期の農耕は、こうした畑作農業(焼畑一定着)を考えると、それが照葉樹林帯におけるサトイモなど球根栽培とともに次第に定着し拡大の方向をとりつゝあった。

そこで問題は弥生式文化の根幹ともいべき稲作についてはどうであったろうか。これについては、縄文晩期の育種的研究(1962・九州大)における土器圧痕籾型の検出や、唐津市汲田貝塚(1966・九州大)などの炭化籾の出土など注目すべきものがあり、更に熊本県上ノ原遺跡の晩期I式との共伴出土(1971、72・小谷)などとともに晩期初頭においてはすでに稲作を考えてもよい。ムギとコメの両者を出土した上ノ原、*side-blade* と炭化籾の出土をみた汲田貝塚から、晩期においては水田、陸田両者の農耕が考えられる。この水稻、陸耕(ムギの他アワ、ヒエ)農耕は、採集と併せて考えるべきで、縄文文化(狩猟社会)の存続の中で農耕が初められたことになる。この晩期の半

栽培社会の中にあつて、重要な宗教上の問題は埋葬にカメ棺が固着しつゝあることである。おそらく、今後晩期における墓地の発見があるとすれば、カメ棺が主体となることであろうしカメ棺の固着と集落の構造分析とが、半栽培と、農耕の内容をこまかに細分することになる。

カメ棺の発達と、埋葬の構造、それに農耕の諸問題を結びつけることによって、西日本の原始農耕の問題を深層で究明することになる。それには民俗学的研究の力を大いに借りなければならぬし、民俗学と考古学の総合的研究を目指さねばならぬ。

西日本のカメ棺の発生と発達、弥生文化の前段の舞台で、農耕の開始とその発展に大きく影響されて出現したことが問題とされれば、この課題の目的はある程度果されたことになると思う。

### 3. 縄文後晩期集落とカメ棺

#### (I)

前述の如く、縄文後期の呪術的葬礼の中からカメ棺に定着した葬制えの変化を再び筏遺跡の実態からみてみることにする。筏遺跡は長崎県南高来郡国見町神代東里乙に展開する約3ヘクタールの大遺跡である。この調査概要は、すでに発表(1969、古田)されておるから大要はその方にゆずることにする。遺跡は島原半島の中央雲仙岳から四方に走る放射谷の一つと発達した扇状地の末端、半島北部海岸に面した標高6~7mの低台地に存在する。この一帯は神代、東里、西里などの旧条里址でもあつて、農地開田の適地に立地している。遺跡はこの条里遺構の施行された地表面より40~60cm以下であり、厚い表土によって今日まで保存されていた。遺跡は1810年(文化7年)発掘の遺物が神代小学校に保存されているといわれ、1913年(大正2年)島原鉄道の布設工事で多数の遺物が発見されているので、遺跡は相当以前より注目されていた。その後、古田正隆、上田俊之の両氏が中心となり1957年以降1967年迄5次にわたる調査を実施して、拡大な遺跡の研究調査により全容が明かとなった。

遺跡全体として遺物の出土が多く、柱穴などの発見は各所にみられたが、堅穴の存在は不明であった。広い範囲にわたって住居址が存在したものと推理される。出土された遺物は、縄文後期磨消縄文Ⅲ式(西平式)が主体で共伴石器には所謂扁平石器と石庖丁形石器が目立つ。また十字形の多頭石器も出土し、第一次の改葬分骨のかピットから成人大腿骨とともに1個をみいだしたのにつづいて、第3次の調査では7個の出土をみたが、そのうち4個が甕棺内部など埋葬と関係して発見された。

さて埋葬は、遺跡のほぼ中央絶好の場所で発見された。第1次の1960年から3次の66年までに発見された墓地は、土壙墓とカメ棺とであつて、その群存の状態と併せて、弥生文化における葬制の開始を考えさせられる。第1次には大形の河石と平石を組み合わせた祭壇風の遺構をともなった粗製の伏ガメ2個に磨消縄文Ⅲ式土器の3個の深鉢の副葬をみた。最寄りの一次埋葬遺構と合せて改葬(1969、賀川)の可能性を考えた。第2次には合口カメ棺3個が土壙内から発見された。第3次には、単ガメまたは合口カメ棺として12個が群存して発見され、合計カメ棺は17個以上となる。その他古田氏の最近の報告では合計35個の容器葬(カメ棺)を報告している。

カメ棺の出土状況は、1次の場合、葬制として儀式的状態をあらわし、墓前祭を思わせ、その場にカメ棺を安置している。カメ棺の周辺に柱穴を思わせるものゝ存在や、カメ棺附近が築き固め

てあるところから衷屋、墓小屋など殍を考えさせられた。

2次の合口カメ棺は大小2個の土器を合せたカメ棺で3基のセットである。下ガメが小さく、上ガメが大きい鉢形土器を使用している。この他不確実ながら棺とみられるカメや土壙が存在した。ともかく古田氏の実測でみると、垂直に土壙中に安置されたカメ棺は、上、下合せて、内部の大きさは45cmの深さと頸部(幅)25cmほどとなる。福岡県浄土院出土の同時期カメ棺は単棺と考えられ内部の実高40cmであるから筏遺跡では2個合口にして大同小異、浄土院では火葬墓として注目されている。

筏の3例は上下合口カメ棺で、下部の鉢は底部は故意にぬきとっている。この底部を故意にぬきとる方法は、他時代のカメ棺の二次的穿孔と同じようにカメ棺の一つの共通した要素である。この場合火葬骨または二次的処置による改葬であれば成人遺骸を収納できるが、それでは底部除去の意味がなくなる。幼児、早生児などの埋葬に使用されたものとみられる。

3次調査のカメ棺は全部で12個以上で、確実に棺とみられるもの12個のうち、合口が3例存在した。これらは土壙中に、横位、垂直などの安置法の差があるが、十字形石器及び、扁平長方形磨石などの副葬品が存在したと古田氏の報告は述べている。

さて、これらカメ棺の存在は、35個以上をしめ、その群墓的性格、土壙での安置状況、底部の故意な除去(晩期Ⅱの島原市礫石原では直立安置のカメ棺に底部除去して、その部位をカメ棺の上蓋とした例がある)すること(弥生の二次的穿孔の前段と考えられる)など興味をひく。また合口、単カメなどの混用など、副葬品の存在などとあわせて、筏遺跡の広大な集落の群墓状態は、弥生式の集落に非常によく類似しているといえる。

古田氏の報告では、扁平石器を重視しているし、実際にその石器の使用痕を十分に観察すると、着柄の鋤先、及び手掘りの鑿状の用途を考えられる。それに *blede* 技法による *side-blade* は、植刃鎌(1968・賀川)として収獲具とみてよい。こうした中で、いずれにしても、カメ棺の登場は、遺跡埋葬法の一つの制度として農耕社会に展開した習俗とみて、穀類栽培の起源を縄文後期磨消縄文Ⅲ式文化に求めることができよう。

## (Ⅱ)

阿蘇山の東西に分布する有望な縄文晩期遺跡に条溝を配置して集落を仕切るという弥生式的集落の存在は次第に明らかにされつゝある。その代表的遺跡が大分県横迫(1972・賀川他)熊本県古閑遺跡など有望な遺跡である。これら遺跡は平地に住居をもち、中を広いU字溝で集落を仕切り、それぞれ共同体形成をおこなう。条溝の性格が、いまひとつ問題があって弥生式における村落単位をあらわすかどうか問題がある。

さて大分県竹田市小高野は、標高330 m、大野川と門田川との二つの河川により浸蝕孤立した丘陵で南側に木野、更に大石の晩期大集落、そして東側には川を挟んで片ヶ瀬などの遺跡がある。この地方熔岩台地の典型で、台地の上は平坦な耕地となっている。遺跡は、台地の中央一帯、多くの遺物が散布し、集落を意味する。台地の中心は近年水田化して耕地の変更があるので、調査対象となるのは、台地の半分にも満たない場所である。

集落一帯と考えられた台地の中央では、1973年10月調査がおこなわれ、小さな条溝と、堅穴住居

址が発見された。住居址は、弥生の住居（円形堅穴）と切り合って重複していたが、方形隅丸、径3.80m、巾3.25mで、周壁にそって三つの柱穴があり、中央で二室に仕切る如く三つの柱穴が並ぶ。西側に焼土の重く推積した炉址があり、遺物として土器片や扁平石器が多量発見された。この住居址の完掘によって、この地方の晩期住居に堅穴形式が存在することを確認し、平地と堅穴の共存を確認することができた。出土遺物のうち、石器類は流紋岩、安山岩などの扁平石器が多く、所謂、突棒先端に着装する鋤形石器と考えるもの、また手掘りの鍬とみられるものが量的に多く、石鏃の減退は著しい。

集落地帯から離れた台地の南側はなだらかな傾斜地で台地の縁端では急傾斜となって60m程の門田川に至る。縄文晩期の墓地は、この台地南側のゆるやかな傾斜地に群存して発見された。墓地はすべてがカメ棺と考えられ、合口カメ棺を含め5個が発見されている。初め鳥養考好氏の注意するところとなり、1971年3月、坂田邦洋氏を中心とする調査がおこなわれ、縄文晩期Ⅲ（夜臼期）の群墓を確認した。勿論、この時期は、1973年の住居址（晩期Ⅰ）との間に時期差があるため、双方を同一視することはできぬが、晩期Ⅰ（大石遺跡2770±120.B・P）と晩期Ⅲ（汲田遺跡、夜臼単純、2370±50.B・P）では実年代で400年ほどの差があるが、この台地はその間、連続して集落が形成されたものと推察される。筏遺跡に比較して調査面積も少ないが、晩期400年間の集落に附属して墓地が個定されたこと、それが晩期Ⅲに関する限りカメ棺が主体であることは興味深い。今後、この集落は、継続で調査の必要もあり、大石遺跡同様の重要な晩期遺跡となることであろう。

### （Ⅲ）

縄文後期筏遺跡と、晩期小高野遺跡の集落とカメ棺の出土については、以上の如くであるが、更に両者の生産を追求してみよう。島原半島の扇状原の先端に位置する筏遺跡は縄文後期遺跡の立地として非常に一般的であるが、当時の共通な立地条件は、狩猟と漁撈に適した場所が望ましい。ところが島原半島の沿岸は同じ有明海に面していたとしても、佐賀や福岡側の北東部と比して著名な貝塚がない。所謂干潟と称する場所に欠けるのである。筏遺跡の小貝塚にしても、遺跡の規模からして、ほんのわずかでしかない。また漁具としての石錘などの発見も少なく、網漁業も期待できぬ。

狩猟はどうであったろうか。石鏃は後退的で、わずかに剥片鏃が数える程度発見されている程度である。剥片技術は以外と発達し、bladeをおとす技術は、その大部分がside-bladeの製品として使用しているので、狩猟にもそう期待できぬ。石皿の量的出土から採集又は農耕には適した場所といえる。side-bladeと扁平石器は、収穫と、農耕の道具と考えてよい。中東エジプトのFayumをはじめ各地で発見された植刃鏃（1963・Sonia-Cole）はSickle-bladeに対比すべきもので、長崎県脇岬出土の縄文後期のオオムギの出土（1973、松本）とともにこの石器は当時の農耕の一面をよくあらわしているものと推定される。ともかく筏の丘陵地帯は、畑作による生産以外に集落を維持する方法はまず考えられない。近代迄アワ作農耕が広くおこなわれていたといわれる。

アワやヒエ、それにキビは近年めっきりその栽培がみられなくなった。大野川流域の縄文晩期の遺跡が立地する阿蘇熔岩台地は、有望な畑作地帯で、採集、狩猟以外は近年迄雑穀栽培がおこなわれ、今日でもソバ畑が各所にみられ、一部にはシロアワ、アカアワ（モチアワ）、キビなどの栽培

がおこなわれている。大部分はトオモロコシ、陸稲に変わってはいるが、一部に古い穀類栽培の伝統がみられる。四方を深い河谷で仕切られ水利の便が必しもよくない丘陵地帯の晩期遺跡から量的に多数の扁平石器 Adze-blade が出土し、この大形石器に対して、委縮した薄刃の石鏃が少量出土することは、晩期の生活舞台が、畑作に依存している結果といえる。この問題は本稿の主体ではないので省略するが、こうした畑作農耕の最適地としての、後、晩期遺跡にカメ棺の定着をみることは、水稻以前において、焼畑農耕を主体とする定着農耕を考えねばならぬ。竹田市小高野遺跡の場合、こうした農耕社会のあり方を弥生文化の前段として考えることは不可能なことであろうか。

## 結 語

縄文時代の埋葬の方法は各種方法（生活、生産方法の違いによる基本的あり方）がある。死者の遺棄、破損などを含む各種埋葬はいずれも、死者に対する宗教的あり方の相異である。カメ棺といえども、そうした埋葬の一つであるから、縄文時代には相当古くから存在したとみられる。しかも縄文早、前期頃から顕著な例が東北地方であらわれ、中期になると関東一帯でも遺骸の処理にカメを使用し、また中部山岳部地帯では、一種の定法ともいえる「埋甕」の出現となる。

しかし縄文各時代の葬法は、如何なる方法をとったとしても、それは異状な呪術性ということであって、葬礼、葬法としてのある固定思想にもとづく定法定着葬法というまでに発達したものとはいへない。その意味では西日本での弥生文化、カメ棺や土壙を主体とする一種の固定葬法は、やがて周溝墓をともなう高塚へと発展的傾向をみせ、古墳文化の盛期に対する基礎を作ったといえる。

近時、弥生文化の源流を求める研究の中で、農耕の問題は、一つに弥生文化の葬制の追求という問題となってあらわれつゝある。ここに従来の縄文のカメ棺というニアンスと違った意味で、弥生文化の前段という課題で縄文——弥生のカメ棺を考えて行く必要があると考える。西日本では最近 100 基を越える縄文後晩期のカメ棺が存在し、この傾向は間もなく、尨大な量となってあらわれ、弥生文化への影響という課題では最大なものとなる。ここに西日本における縄文文化のカメ棺を弥生文化の諸相の中で、土壙とともにもっとも重要なものとして、今後の研究に期待しなければならないことは当然で、特にカメ棺を弥生文化の発生の課題としようとする考えも成り立とう。

## 参考文献

- 賀川 光夫 1960 中国先史土器の影響 古代学研究 25  
 賀川 光夫 1961 縄文後晩期における大陸文化の影響 歴史教育 9.3  
 佐原 真 1968 「日本農耕文化の起源」をめぐる、考古学ジャーナル、No23 その他  
 梅原 末治 1969 九州における中国史前の黒陶系土器、史林 52.3  
 中尾 佐助 1966 栽培植物と農耕の起源 岩波新書  
 上山春平他 1969 照葉樹林文化 中公新書  
 佐々木高明 1971 稲作以前 NHKブックス  
 KAGAWA MITSUO (1974) "Primitive Agriculture in Japan : Latest Jomon Agricultural society and Means of production" ASIAN PERSPECTIVES XXI (1)

- 古田 正隆 1969 筏遺跡発掘調査報告 国見町教育委員会
- 小田富士雄他1972 福岡県京都郡苅田町 浄土院遺跡調査概報 浄土院調査団
- 中国科学院 1963 西安 半坡 考古学研究所
- 賀川 光夫 1969 縄文時代のカメ棺 考古学ジャーナル No. 34.35.37.
- 江坂 輝弥 1968 縄文文化期における改葬カメ棺葬の研究 北奥羽古代文化 I
- 笠井 新也 1918 陸奥国発見の石器時代の土壙墓について、考古学雑誌 9巻2号
- 清野 謙次 1974 日本民族生成論—日本古人骨の埋葬状態—日本評論社
- 文化財保護委員会 1952 吉胡 貝塚 埋蔵文化調査報告 1
- 平野元三郎、滝口宏 1933 下総高木村寒風発見の人骨、ドルメン 2.7
- 内藤 芳篤 1972 福岡県京都郡苅田町 浄土院遺跡
- 永井昌文他 1972 山鹿貝塚 芦屋町埋蔵文化財調査報告 2
- 梅原 末治 1969 福岡県山鹿貝塚出土の鯉節形大珠 九州考古学 36. 37号
- 永井昌文他 1970 荒多比貝塚 大牟田市教育委員会
- 内藤 芳篤 1963 熊本県沖の原貝塚の人骨 長崎大学医学部
- 坂本経堯、坂本経昌 1971 天草の古代
- 羽田野一郎・坂田邦洋(1964) 稲荷岩陰遺跡発掘調査報告「大分県地方史」34号、
- 賀川 光夫 1967 大恩寺・稲荷洞穴「日本の洞穴」日本考古学協会、平凡社
- 賀川 光夫 1974 縄文後期土器の再吟味「コウゴ—松遺跡調査報告」久住町教育委員会
- 河野 広道 1971 貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ「北方文化論」1.
- 1974 大分県宇佐市敷田西和田遺跡の発掘が大分県教育委員会にて実施、磨穀石とオオムギの圧痕らしい土器底部が縄文後期磨消縄文Ⅲ式土器に共伴した。
- 黄基徳、都宥浩 1957 智塔里遺跡中間報告「文化遺産」5.6号
- 賀川 光夫 1957 サイド、ブレードについて、「考古学ジャーナル」16.17
- 1962 九州大学農学部育種学教室、九州大学文学部考古学研究室、九州出土古代米一覽、「九州考古学」15、
- 1966 九州大学パリ大学合同調査(唐津市汲田貝塚)において縄文晩期Ⅲ式土器包含の貝塚より炭化米2粒発見、
- 小谷 凱宣 1971 動植物遺物「熊本市健軍町上ノ原遺跡調査報告」(1972) Yoshinobu KOTANI  
Implications of Cereal Grains from Uenoharu, Kumamoto The Journal  
of the Anthropological Society of Nippon vol.80, No2, Jun,
- 賀川 光夫 1969 縄文時代のカメ棺 考古学ジャーナル 8
- 賀川 光夫 1968 九州西北部にみられるサイドブレードについて 考古学ジャーナル 17
- 賀川光夫他 1972 縄文晩期農耕の研究 横迫遺跡 別府大学考古学研究所報告
- SONIA COLE 1963 "THE NEOLITHIC REVOLUTION、 British Museum
- 1973 大阪府立大学農学部松本嘉氏によって、長崎県脇崎発見の縄文後期文化層より発見の大麥が調査され、炭化物について佐藤敏也氏も大いに同意されたという。(1974年2月7日付手紙)